九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

絵本を通して語られる内的体験：青年期に絵本を読むことで表出される語りに着目して

藤森，優美香
九州大学大学院人間環境学府

佐々木，玲仁
九州大学大学院人間環境学研究院

https://doi.org/10.15017/2228893

出版情報：九州大学心理学研究. 18, pp.105-115, 2017-03-23. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

Kyushu University Psychological Research
2017, Vol.18, 105-115

絵本を通して語られる内的体験：青年期に絵本を読むことで表出される語りに着目して

藤森優美香　九州大学大学院人間環境学府
佐々木玲仁　九州大学大学院人間環境学研究院

The experience of reading a picturebook: From eleviewpoint of adults' narratives

Yumika Fujimori（*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*）
Reiji Sasaki（*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*）

In this study, we investigated the experience adults have when they read a picture book. Twenty university students participated in the survey and read a picture book. They read the picture book alone after which we interviewed them and extracted the emotions and personal stories that the experience had elicited. The results showed that 90% of participants spoke of their emotions, and 70% of participants talked about themselves. Seven overall themes could be distinguished in students' expressions of their emotions, which were all related to each other. Not only "The contents" but also "The way of reading the picture book" and "The picture book itself" elicited emotions in them. According to the above results, when reading picture books, adults experience emotions and engage in self-reflection.

Key Words: Picture book, Adults, Emotions

Ⅰ．問　　題

1. 絵本の読者

絵本の読者と聞いて，一般的に想定されやすいのは子どもであろう。従来，日本では絵本は子どものためものとしての認識が強く，日常生活に則った学習や情操教育などの役割を担っている。また，絵本は大人が子どものために読み聞かせをするものとしても認識されており，松居（1973）は絵本は子どもが大人に読んでもらうことが基本だとしている。このような読み聞かせや子どもが絵本を読むことに関する知見は実践的なものを含め多く積み重ねられている。一方で，絵本そのものの芸術的側面も評価されている。中川（2002）は1970年代からは絵本が大人の読者層を獲得し，子ども向けの消耗品であるという図式が崩れた時代であると述べている。このように，絵本は「子どもの絵本」という側面と「芸術作品としての絵本」という2つの側面を持っている。しかし，芸術作品としての絵本は大人が絵本を読むことへの意識づけで留まっており，大人が絵本を読むことが良いことだとされてきていながらも，実際に大人が絵本を読むことでどのような体験をしているのかということ，絵本が大人の読者にどのような影響を与えているかについては明らかにされていないままであった。そこで本研究では，大人が芸術作品として絵本を読むことでどのような体験をしているのかを明らかにし，大人が絵本を読む意義について検討する。

2. 絵本を取り上げる意義

大人が絵本を読む意義について検討するとしたが，なぜ「今」，「絵本」を読むことを取り上げるのかということを，絵本が芸術作品であることをふまえて検討する。

宮原（2009）は「芸術」と「美」の関係性に言及して「芸術」を「非日常」のものだと捉えている。また，酒井（2013）は「絵本」は新しい芸術の展開になるとしており，「絵本」を新しい芸術の1つとした。しかし，芸術作品である絵本は「非日常」のものとなり得る一方で，子どもの頃には身近な「日常」のものであった。つまり，絵本はかつて「日常」であり，それを経て「非日常」に移り変わるという移行を遂げるものであるといえる。「日常」と「非日常」について，嶋根（2001）は「諸事物を異なる性質に分類して認識するということは，人間の思考の最も基礎的な部分」であり，「社会には個人的な判断をかなりの程度規定する共通の基盤」があったが，現代では社会の変化や科学技術の発展によりそれらの境界が曖昧になっていることを危惧している。「芸術」を「非日常」とするならば，「絵本」は「日常」から「非日常」への移行を経ており，「非日常」の「芸術」には完全には含まれていないことになる。また，日本において「絵本」の登場は江戸時代の赤本が元だと言われており，その後は主に教育的・思想教授のために使用され，戦後の社会の変化や科学技術が発展し始めている近代に「芸術」と言われるようになった。（鳥越ら，2001；2002a；2002b）絵本はその歴史からも必ずしも「非日常」の存在とは言えず，また，低コストでどこでも手に入り

やすいという「日常」に密着している部分がある。その点で，所謂芸術という「非日常」とはかけはなれている。しかし，それでもなお現在に絵本は「芸術」として位置付けられている。

このように絵本には従来の「芸術」にはないものがあると考え，それがどのようなことを読者に促すのかということについて検討することについては意義があると考える。

3. 絵本の性質

(1)「非日常」という芸術に触れること

絵本の「日常」と「非日常」の移行について述べたが，従来の「非日常」という芸術について考える。鑑賞者の立場として芸術に触れるということは非日常的な行為であり，だからこそ，「芸術」として成り立っている部分がある。しかし，非日常的なものであるから人間が触れにくいものであるかといえば，そうではない。酒井（2013）は芸術には作品は個別であるが，個人を超えた普遍的な力が存在しているとし，千住（2013）は「芸術は，人間が人間として存在していくための最も本質的な条件と密接に関わっている」とした。また，心理療法における技法の１つとして芸術療法が存在することからも，人間の心や存在それ自体に芸術が関わっていると考えられる。芸術に触れるということは，非日常の世界で，人間として重要な営みであると考えられる。

(2) 絵とことば

その芸術の１つとして，絵本は絵とタイトルを含むことばが共存している点が特徴に挙げられる。Nikolajeva & Scott（2006/2011）は絵本においてことばは読者の理解や特定の解釈を強いるが，絵と矛盾した言葉を使用することでズレを出したり曖昧さを出したりすることができるとし，Doonan（1993/2013）は絵はことばが意味するものを詳しく見せ，豊かにする一方で，絵はことばが意味しているものに矛盾したり，ことばの意味から逸脱したりするとした。絵本では絵があることが自明であり，絵が主導で進められていくものである。また，言葉があることで読者に読みを制限する一方で，読者の解釈を引き出したり，刺激したり整えたりする役割を持つと考える。絵本とことばの関係は対等ではないが，互いに影響しあうことで読者に複雑で多様な読み方をもたらすものと考えられる。

(3) 絵本の構造・技法

絵本の基本構造として，廣松・森田（2010）は言語と絵が配置されることで１つの画面を構成し，ページをめくることによって読者の記憶に画面が積み重なるものとした。絵本は１つの場面を１枚の画として，さらにそれを積み重ねることによって継時的な軸のあるものとして構成されている。また，絵本の装丁について瀬田（1985）は表紙から裏表紙まで全体で１つの本を作っているとし，林（2005）は扉絵は表紙から物語への過程で物語のテーマに関わっているとした。また，絵本の中で使用されている技法として藤本（1999）は絵本のめくる方向が進行方向であり，その逆は，逆方向に進むことや登場人物のマイナス状況を示唆するものだとした。絵本は絵やことばだけでなく，表紙から裏表紙までの装丁，さらには読者を絵本にひきこむための技法的なしかけが施されており，内容のみならず絵本という１冊そのものが１つの作品として芸術的側面を見せていると考えられる。

(4) 芸術のなかの絵本の位置づけ

芸術作品における絵本の位置づけについて検討するために，芸術作品としての絵本と他の芸術との比較を Table 1 に示した。本研究では絵本を「読む」という立場に立って，創作するではなく鑑賞するという観点から対象の芸術作品を選出・比較している。比較するカテゴリーとして「表現形態」「鑑賞場所」「鑑賞方法」を挙げ

Table 1
鑑賞者の視点から他の芸術との比較

対象		絵本	文学作品	絵画	彫刻	映画	舞台芸術		
							演劇	音楽	舞踏
表現形態		絵・言葉	言葉	絵	石膏等を加工	動画・音など	身体・言葉音・光等	音	身体・音など
鑑賞場所		限定なし	限定なし	美術館	美術館等	映画館	劇場	劇場等	劇場等
鑑賞方法	黙読	○	○						
	音読	○	○						
	観る	○		○	○	○	○	○	○
	聴く	○	○			○	○	○	○
	触る	(○)			○				

ている。まず，「表現形態」は，対象の芸術がどのような表出方法を媒介として発信しているかという観点から取り上げた。次に「鑑賞場所」は鑑賞者が特定の非日常空間に移動することで鑑賞が可能となるのか，あるいは日常空間にいながら鑑賞が可能なのかという観点から取り上げた。山本（2016）は芸術は空間を持ち，「それらは，日常の空間とは異質でありながら，しかし日常の空間になんらかの仕方でつながり，影響をあたえるもの」とした。従って，それぞれの芸術の位置づけを比較した際に「鑑賞場所」は必要と考え，記載した。最後に「鑑賞方法」は鑑賞者がどのような手段で対象の芸術を取り入れるのかという観点から取り上げた。このように「表現形態」と「鑑賞方法」は発信と受信で対応関係がある。

この比較表に基づいて，絵本における「表現形態」「鑑賞場所」「鑑賞方法」それぞれについて説明する。まず，前述したように，絵本の表現形態は絵とことばである。次に，「絵本の鑑賞場所」において，他の芸術と比較したときに文学作品と同様に限定されない。このことは他の芸術作品はその「場所」に行くということで「非日常」の体験が得られるが，絵本ではその体験が得られず，「日常」に密接したものとなる。その点で他の作品と非日常性とは一線を画すと考えられる。最後に「鑑賞方法」において，絵本は他の芸術と比べてその方法数が多い。読者から多様な方法・態度で鑑賞に臨むことができる。

Table 1 より鑑賞場所において，絵本と文学作品は「非日常」になりにくいとしたが，両者とも読者が 1 冊の本の中に入り込んで読むという意味では「非日常」の世界に手軽に入りやすいものであると考えられる。Table 1 に見られるように文学作品と絵本は類似した部分も多いが，異なる点も挙げられる。その 1 つに，文学作品は特定の誰かの読み物という認識のされ方が絵本ほどではない。言い換えると，文学作品は読者の年齢による区切りが薄く，より日常に溶け込んで存在していると考える。一方で，絵本は冒頭でも述べたように子どものためのものという認識が強く，大人になる過程で 1 度自分のために読む絵本からは離れることが多い。そのため，絵本を読むという非日常性に加え，大人になって絵本に触れるときには非日常的な物としても再び触れるということになる。つまり，絵本は大人が読むということで「非日常」を保っている。また，絵本の装丁は中身が滲み出るような表紙・中表紙・裏表紙であり，1 冊で絵本の世界観を演出している。文学作品は装丁が出版社によって変容することもあり，必ずしも絵本のように 1 冊で世界観を見せるように仕上げられているわけではない。以上 2 点より，絵本と文学作品の違いが考えられる。

4. 大人が絵本を読むこと

人間が芸術に触れること，絵本の芸術性について述べてきたが，では，現在大人が絵本という芸術作品を読むことに対してどのように言及されているのかということに着目する。河合（2001）は現代の大人にとって情緒的・感性的なものが重要であるとし，その点で大人が絵本を読むことを推奨している。松瀬・松瀬（2013）は大人が絵本を読むことで遊び心や想像する心というものを取り戻し，それらは自分探し・自己探求と密接に関連しているとした。大人が絵本を読むことの重要性やその効果については肯定的なものとして言及はされているが，絵本を読むことで大人がどのような体験をしているかについては明らかにされていない。また，大平（1994）は絵本や昔話のあらすじを患者に話すことで，患者が自分の状況を把握できるとし，実際の臨床場面でも絵本の内容を取り入れているが，絵本と童話の扱われ方が混在しており，実際に患者が絵本を読んでどのような体験をしたかについて言及されていない。したがって本研究では，絵本の芸術的側面を踏まえたうえで，大人が絵本を読むことでどのような体験をしているのかということについて明らかにする。

Ⅱ．目　　的

本研究では，青年期の大人が絵本を読み，語りによって表出されるものに着目して，大人が絵本を読む意義を明らかにするため，以下の点から検討をおこなう。

1. 絵本の芸術的側面が大人にどのような内的体験をしているのかについて，読み手の語りの感情表現，また感情表現に至った過程を分析・検討する。ここでいう内的体験とは，読み手に生じる感情表現，感情表現に至った過程とする。

2. 語りのうち絵本という形式を通して読み手が表出した内的体験より，絵本が読者にどのような体験を提供しているかを検討する。

Ⅲ．方　　法

1. 絵本の選定

絵本の選定基準としては，先述した絵本の装丁，技法等の構造的特徴を捉えていること，内容として実験協力者が言語化しやすいということ，かつ大人だからこその表出がみえやすいと考えられることの 3 つを取り上げた。なお，絵本の装丁，技法等については，瀬田（1985）は，表紙や裏表紙が絵本を形づくり，林（2005）は扉絵は物語のテーマに関わっているとした。さらに，藤本（1999）は絵本のめくる方向が進行方向で，その逆はマイナス状況等を示唆するとし，これらのことを構造的特徴とした。これら 3 つを基準として本研究では「はじめてのおつかい」（作：筒井頼子　絵：林明子　横判 32

ページ　20×27㎝）を取り上げた。以下，この絵本が上記の条件にどのように対応しているかを説明する。

まず，絵本の装丁，技法等について，この絵本は表紙から裏表紙にかけて絵本の内容と関連させたエピソードとして描かれ，絵本の装丁として成り立つと考えられる。また，この絵本は進行方向が右向き，マイナス状況は左向きという技法が使用されている。

次に，内容として実験協力者が言語化しやすい体験を得られることに関しては「はじめてのおつかい」の内容は，5歳の女児が母親に頼まれて初めておつかいに行く過程を描いたものであり，田澤（2007）は，この絵本を主人公の成長物語あるいは生活経験絵本として捉えられているとしている。このように具体的なストーリーを持つことから，実験協力者が言語化しやすい内容だと考えられる。

最後に大人だからこその表出がみえやすいに関しては，小さい子どもが「初めて」おつかいに行くという内容は，現在の大人がかつては類似した経験をしたことがあるだろうが，現在は「はじめて」のおつかいという経験は得難いと考えられる。このように，「はじめてのおつかい」の内容は大人にとって幼少期には経験はあるが現在は得られない経験であるため，子どもの目線からは違う目線で読むことができるものだと考えた。その点で，「大人だからこそ」という部分が浮き彫りになると考えた。

2. 実験協力者

九州地方の大学生20名（男性9名，女性11名，平均21.3歳）。第一筆者と面識のない人を対象とした。

3. 実施期間

2014年11月中旬から12月初旬にかけて実施した。

4. 実施方法

協力者に1人で絵本を読んでもらい，その後第一筆者が半構造化面接を実施した。

まず，絵本を読むことに関する実験であること，実験は記憶力を測定するものではなく回答に正解は無いこと，研究の中で個人が特定されないこと，途中の実験中止が可能であることを事前に伝えた。

次に，絵本を1人で読んでもらうこと，絵本の読み方に時間・回数の制限を特に設けておらず自由に読んでほしいこと，協力者が満足いくまで読んでほしいこと，協力者が「読み終わった」と感じたら室外にいる第一筆者を呼ぶことを伝えた。

さらに，絵本を読み終わった後には，協力者に録音の許可を得た上で半構造化面接を実施した。基本的な質問事項はTable 2に示した。なお，これらの内容に第一筆者が質問をする前に自発的に語られた場合には重ねて質問はしなかった。本研究では協力者の内的体験がより表出しやすくなるような質問構成をした。その構成は，1番の「どうでしたか」と方向性のない質問をし，2番から6番の質問を重ねることで連想をひきだし，絵本を読むことにまつわることを聞いて協力者がどのように感じたかということを賦活した。そして7番の「どんな気持ちになりましたか」で再度協力者の内的体験を尋ねるというものとした。1番の「どうでしたか」と7番の「読んでみてどんな気持ちになりましたか」は質問に誘導されることがないため，協力者の回答が限定されず，自由に答えられる。このことより，これらに対する回答は質問による誘導ではなく，協力者が主体的に，尚且つ質問の意図を考えることなく答えられるものと考えた。このことから，1番と7番に対する回答は，協力者の内的体験の特徴が顕著に表れると考えられる。

5. 分析方法

本研究では上述したように1番と7番のような方向性のない質問に対する語りを取り扱う。内的体験を感情表出の過程としているため，自分自身の感情が語られたものに関して分析した。分析方法としては，まず感情表現

Table 2
半構造化面接時の質問事項

質問順番	質問事項	教　示
1	絵本を読んでの体験	どうでしたか
2	「はじめてのおつかい」を読んだ経験の有無	今までにこの本を読んだことはありましたか
3	気になること	気になったところを教えてください
4	印象にのこったこと	印象に残ったところを教えてください
5	ひっかかりを感じたこと	ひっかかったところを教えてください
6	思い出したこと	何か思い出すことがあれば教えてください
7	絵本を読んで感じたこと	読んでみてどんな気持ちになりましたか
8	最後に言っておきたいこと	最後に何か言い残したことがあれば教えてください

を抽出した。抽出対象の感情表現は中村（1993）の感情表現辞典を参照した上で感情表現に該当し，なおかつ登場人物の感情表現の推察ではなく，協力者自身が「はじめてのおつかい」を読んで生起した感情表現であることが明確に判断できるものを分析対象とした。また，中村（1993）は感情を「喜・怒・哀・怖・恥・好・厭・昂・安・驚」に10分類している。感情表現語が辞典の中に無い場合にも，感情表現の意味が10分類の中に該当する場合には感情として取り扱うこととした。次に，どのような部分，あるいはどのような理由からその感情表現に至ったかについての協力者の自発的な発言，あるいは感情表現後に筆者からその感情についてどういうことかを尋ねた際の協力者の語りを抽出し，それらの内容が類似しているものをカテゴリー化した。また，1つの感情表現語に対して，複数の語りの内容が得られたものは，重複してカテゴリー化をしている。

Ⅳ．結　　果

1．語られた感情

自発的に自分の感情を語った協力者は90％（20名中，18名）であった。感情表現語および感情表現を伴う語りの内容の種類をTable 3に示した。Table 3では，感情表現はあるもののそれに伴う語りの内容が明確に得られなかった感情表現語は記載していない。従って感情を語った協力者は18名よりも少なくなっている。感情表現語は「ほっこり」「ほっとする」「和む」「安心」「なつかしい」「あたたかい」「面白かった」「微笑ましい」「好き」「胸が打たれる」「心配」が見られた。「ほっこり」「微笑ましい」は感情表現語辞典に記載はなかったが，広辞苑第6版（2008）によると「ほっこり」は「あたたかなさま。ほかほか。」の意味を持つため感情表現語とした。また，「微笑ましい」は「微笑む」が感情表現語辞典に記載があったため，類似した表現として取り扱うこととした。

感情表現を伴う語りの種類としては「過去の自身の経験と照らし合わせての語り」「現在の自身の経験と照ら

Table 3
感情表現を伴う語り

語りの種類	感情表現語	人数※1	id	例
過去の自身の経験と照らし合わせての語り	ほっこり	1	3	小さい時に同じようなことがあった
	ほっとする	1	15	自分のことを思い出した
	なつかしい	4	3,7,17,20	この絵本を読んだことがある．ちっちゃいころ絵本を読んでいたときの風景が目に浮かんで．小さい時におなじようなことがあった
現在の自身の経験と照らし合わせての語り	和む	1	9	久しぶりに絵本を読んだので
	なつかしい	1	17	絵本を読んだのが久しぶりだったので
物語内容からの語り	ほっこり	3	3,4,14	おつかいができてお母さんが待っていたところで
	ほっとする	2	2,19	最終的に買えてお母さんが待っていてくれて
	なつかしい	1	16	この時代の疑似体験という感じで
	あたたかい	2	8,13	親と子の気持ちから．赤ちゃんのために買ってくるところ等から
	面白かった	1	10	頑張ってる様子が伝わってきて
	微笑ましい	1	10	こけてもお金拾ったりなど頑張っているところから
	胸が打たれる	1	17	不安だけども1人で頑張っているところから
	心配	1	19	転んだときやお店の人がでてこなかったときに
読み方についての語り	安心	1	6	頭を使ったりとか嫌な話題を考えずスラスラ読める感じが
	和む	1	9	普段読んでるものに比べて絵が多いので色々考えずに読めた
	なつかしい	1	16	（子どもに読んであげるときと比較して）じっくり見れて
絵の雰囲気についての語り	和む	1	6	挿絵の雰囲気と色鉛筆の雰囲気があいまって．
絵本そのものについての語り	なつかしい	1	12	これ自体がなつかしい
	好き	1	12	もともと絵本が好き
絵からの語り	面白かった	1	19	絵の細かいところこだわっているところで

※1ただし，重複あり

し合わせての語り」「物語内容からの語り」「読み方についての語り」「絵の雰囲気についての語り」「絵本そのものについての語り」「絵からの語り」の７つであった。

７つの語りの種類ににについて順に説明する。

(1)「過去の自身の経験と照らし合わせての語り」

まず,「過去の自身の経験と照らし合わせての語り」については，協力者の幼少期のエピソードについて自発的に語られているものとした。この語りの種類では，大きく以下の２点に主眼を置いて語られたものとしている。１点目は絵本の物語や登場人物，あるいは特定の場面から協力者が自身のことを想起し,「はじめてのおつかい」に類似した経験に関連した具体的な出来事，また，具体的なエピソードは伴わなくとも，子どものころを想起したということを語られたものとした。２点目は協力者が物語の内容を言及したものではなく，幼少期に絵本を読んでいたという読む行為について語られたものとした。

(2)「現在の自身の経験と照らし合わせての語り」

次に「現在の自身の経験と照らし合わせての語り」については，協力者の現在のエピソードについて自発的に語られているものとした。この語りの種類では,「久しぶりに絵本を読んで」という語りは，絵本の内容ではなく読む行為が現在の協力者にとってどういうものであるか，つまり現在大人である協力者にとって久しぶりに絵本を読むということから，今は絵本を頻繁に読むことはないという現在の自身のことが語られたと解釈した。

(3)「物語内容からの語り」

次に,「物語内容からの語り」は登場人物の行動や物語展開，場面について語られているものとした。この語りの種類では，登場人物の行動や関係性，気持ちを協力者自身が推測しうえで語られたもの，特定の場面や物語が展開していく流れ全体について語られたものとした。

(4)「読み方についての語り」

「読み方についての語り」は協力者が絵と文章の読み方について語られているものとした。この語りの種類では，普段読んでいる本と比較しながら，あるいは絵があることによっての読み方が変化していることについて語られたものとした。

(5)「絵の雰囲気についての語り」

「絵の雰囲気についての語り」は絵や画材の雰囲気について語られているものとした。この語りの種類では，さし絵の可愛い雰囲気と色鉛筆という画材の雰囲気について語られたものとした。

(6)「絵本そのものについての語り」

「絵本そのものについての語り」は絵本の内容などには触れずに絵本そのものについて語られているものとした。この語りの種類では，協力者が絵本内容や読むという行為などにも言及せず，絵本そのものを１つの物体として語られているものとした。

(7)「絵についての語り」

「絵についての語り」は絵本の内容ではなく，絵そのものについて語られているものとした。この語りの種類では，絵の描き方などの技術的な言及やではなく，特定の絵に対してその絵についての気付きを語られたものとした。

2. ７つの語りの種類の関係

７つの語りの種類から感情を伴う語りが見られたとしたが，それらはそれぞれに質が異なり，互いに関係し合いながら感情生起に至った。７つの語りの種類の関係をFig.1 に示した。直接感情生起が語られた語りを実践矢印で示し，その語りに至るまでの関係を点線の矢印で示した。これを背景の語りとする。また，絵本を読む行為そのものは直接的な感情生起を促す語りの種類としては語られていないが，絵本を読むこと自体が背景の語りとしてあったので，仮想的に挿入し，７種の語りと同様の扱いをした。以下，これらの関係について説明していく。

７つの語りの種類は同じ水準のものではない。絵本に内包されている語りの種類と協力者との絵本との関わりによって生成された語りの種類とがある。

まず，絵本に内包されている語りの種類として「絵本そのもの」「物語」「絵」がある。これらは絵本そのものから生成されているものであり，さらには「絵」があることが自明であるため,「絵」を背景の語りとして「絵の雰囲気」の語りが生成される。

次に協力者と絵本の関わりによって生成された語りとして「読み方」「過去の自分」「現在の自分」がある。これらは絵本に内包されているものや，読む行為を通して協力者と絵本との関わる要素が強いものであり，絵本の要素を１度協力者が受け取り，そのうえで感情生起した語りが生成されている。Fig.1 にも示したように,「読み方」「過去の自分」の語りは絵本に内包されているものから影響を受けている。従って,「読み方」「過去の自分」の２つの語りを中心にそれぞれの語りの関わり合いを説明する。

まず,「読み方」では絵本に内包されている「物語」「絵」，さらには「現在の自分」の背景の語りから語られている。「物語」では嫌な話題がないことについて,「絵」では絵が多いことについて，そして「現在の自分」からは協力者が普段読んでいる本とは違うという背景の語

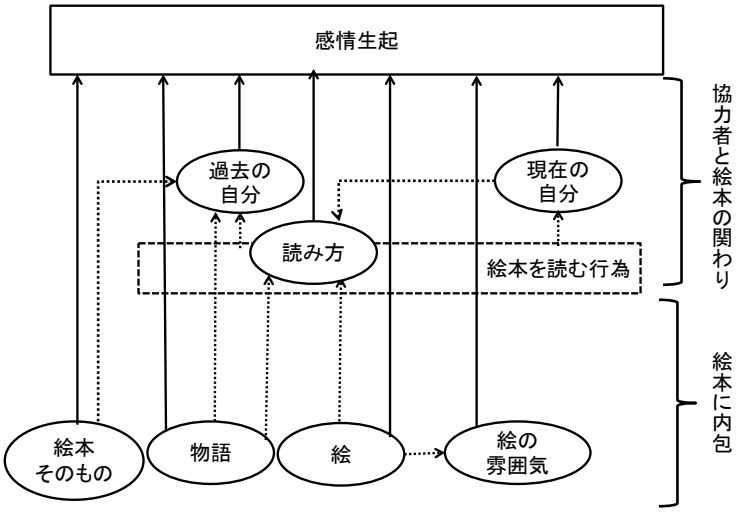

Fig.1　7つの語りの関係

り，アルバイトで読んでいる読み方と違うという語りが複合され，「はじめてのおつかい」の「読み方」の語りから感情生起に至った。

次に「過去の自分」では，「絵本そのもの」「物語」「絵本を読む行為」を背景の語りとしている。「絵本そのもの」では「はじめてのおつかい」の絵本の内容には言及せずに絵本そのものについて，「物語」では登場人物の行動や場面について，「絵本を読む行為」については「はじめてのおつかい」ではなくとも絵本を読むということに着目して背景の語りがあり，それらから過去の自分についての語りが見られた。

最後に「現在の自分」では，「絵本を読む行為」を背景の語りとしている。「絵本を読む行為」は内容などには言及せず絵本を読むという行為を背景の語りとして，「現在の自分」についての語りが見られた。

3. 自分自身についての語り

次に，内的体験として自分自身についての語りに着目した。前述した自発的に語られた自分自身についての語りについては，感情表出を伴う語りのみを取り扱い，また協力者の詳細なエピソードまでは触れなかった。しかし，自発的な自分自身の語りは協力者自身の内的体験の過程として重要な要素として捉えられると考えたため，分析対象とした。分析方法は，類似した内容をカテゴリー化した。

自発的に自分自身について語った協力者は70％（協力者20名中14名）であった。自分自身の語りについてTable 4に示した。この語りでは，感情生起の有無は問わないとした。

語られた内容としては「自分自身の幼少期」「自分自身の現在」の2つに大別された。また，それぞれについて「物語内容・登場人物」「絵本・読書行為」の2つの観点から語られ，計4つの組み合わせで協力者の自分自身についての語りが見られた。以下，4つの組み合わせについて順に説明する。

まず，「自分自身の幼少期」について「物語内容・登場人物」の観点から語られたものについて説明する。登場人物の行為や絵本の話の流れから，自分にもおつかい

Table 4
自身の語り項目分類

	観点	定義	例
自分自身の幼少期	物語内容・登場人物	物語内容・登場人物から語られること	ちっちゃいころに同じような初めてのことの経験があった
	絵本・読書行為	絵本そのものや読書行為から語られること	ちっちゃいころ絵本を読んでいたことが浮かんだ
自分自身の現在	物語内容･登場人物	物語内容･登場人物から語られること	はじめてのおつかいの番組を思い出した，自分の兄弟構成
	絵本･読書行為	絵本そのものや読書行為から語られること	久しぶりに絵本を読んだ，アルバイトで絵本を読んでいる

をしていたこと，あるいは類似した経験があったことについて語られたものとした。

次に「自分自身の幼少期」について「絵本・読書行為」の観点から語られたものに関して説明する。この観点では，物語の内容ではなく，幼少期の協力者と絵本との関わりについて語られたものとした。例えば，協力者が幼少期に絵本そのものが家にあったこと，「はじめてのおつかい」を読んだ経験があったこと等について語られたものとした。

「自分自身の現在」について「物語内容・登場人物」の観点から語られたものについて説明する。この観点では，主人公が姉という設定に言及した自身の家族構成，子どもがおつかいに行くという内容とリンクしたテレビ番組について言及したもの，絵本の内容をそのまま協力者に重ねるというよりも，内容の一部や全体が現在の自分とつながる部分について語られたものとした。

最後に「自分自身の現在」について「絵本・読書行為」の観点から語られたものについて説明する。この観点では，協力者が現在は絵本を読んでいないこと，アルバイトで絵本を読むことがあるというような絵本を読むという現状について語られているものとした。

V．考　　察

1．感情表出に伴う語りから

(1) 絵本に内包される語りから

大人が絵本を読んで感情生起をする際に，本研究では7通りの語りが見られた。その中でも，絵本に内包される語りでは本研究ではFig.1より4通り見られた。小山内・岡田（2011）は文学作品などの物語を読む際に読者は登場人物への共感や感情の生起，登場人物の描写から自己や他者について洞察する体験をするとしており，本研究からも物語内容から登場人物に対する「心配」や「胸が打たれる」等という感情が表出しており，小山内・岡田（2011）の指摘するような体験をしていると考えられる。しかし一方で，絵本を読んで感情が生起する過程としては，物語内容や登場人物の描写からの感情生起ではないものも多く見られた。「絵の雰囲気についての語り」「絵本そのものについての語り」「絵からの語り」については，絵本の内容とは関係なく感情が生起したものと考える。以下，これら3種の語りについて順に説明する。

まず，「絵の雰囲気についての語り」では，「和む」という感情が見られた。これは「挿絵のかわいい雰囲気と色鉛筆の雰囲気」という語りから見られ，このことは林明子が描いた絵の特徴からきているとも考えられる。灰島（2013）は，林明子は，子どもの姿を描いてその子の心情や性格をいきいきと表すことができるとし，林明子の描く女の子を「ただならぬ“かわいさ”」と表現している。このことから，読者にとって絵本の登場人物が親しみを持てる対象となると考えられる。また，色鉛筆が馴染みのある画材であるということも一因として考えられる。これらのことから「和む」という感情が表出されたと考えることができる。

次に，「絵本そのものについての語り」では「なつかしい」「好き」という感情が見られた。これに言及した読み手は子どもの頃に読んだ経験がある人のみであったが，絵本の内容ではなく絵本の存在そのものから感情生起している。このことは，幼少期に自分が触れた絵本は読まなくとも，表紙や裏表紙といった装丁を含む絵本そのものが目の前に存在しているというだけで，感情生起する体験を促すことが示唆される。長年変わらない絵本の装丁は文学作品には少ない特徴であり，このことも影響していると考える。

最後に「絵からの語り」では「面白かった」という感情が見られた。猫の絵という本筋とは関係ないところを描いたものに着目した発言である。「はじめてのおつかい」ではページをまたいで，何匹か猫が登場する。8ページの場面ではその猫のうちの1匹が塀を歩いているだけである。赤いリボンをつけたトラ猫で特徴的ではあるものの，風景になじむほど小さく描かれており，本筋の「おつかい」の物語展開には何の影響もない。しかし，15ページではその猫を探すポスターが掲示してある絵が描かれている。ここで，読者は8ページに描かれていた猫は探し猫であったことがわかる。そして，掲示板の絵は主人公が家に帰る途中に再度描かれている。その絵の猫を発見すること，その絵が継続して違うページに，違う描き方で描かれているということは，言葉では提示されておらず読者が自分で気づくことでしか得られない体験である。この自分で気づくという体験をさせる工夫が「はじめてのおつかい」にはちりばめられている。先述した藤本（1999）の進行方向，マイナスコードの技法以外にも読者が絵を読み込むことで，主人公の物語以外の物語を発見し得るような絵本だと考える。これは「はじめてのおつかい」の特徴から表出したものだと考えられる。

絵本に内包される語りの種類からの感情生起は，一般的には絵本の主たる表現であると考えられるような物語内容のみではなく，「絵の雰囲気」「絵本そのものについての語り」「絵についての語り」という絵本によって個性の強い部分，また，見過ごされがちな絵本の側面からも生起することが示唆される。

(2) 自分を通した語りから

大人が絵本を読んで感情生起をする際に，協力者と絵本の関わりを通した語りでは3種の語りが見られた

(Fig.1)。以下，3種の語りについて説明する。

まず，「過去の自身の経験と照らし合わせての語り」からは「ほっこり」「ほっとする」「なつかしい」という感情生起が見られる。「小さい時に同じようなことがあって」のように登場人物の出来事と自身をすり合わせるような過去の振り返りから感情を生起している。これらは「はじめてのおつかい」の特徴から表出したものだと考えられる。『初めて』の『おつかい』は，一般的には子どものころに類似した経験があるような具体的な出来事として捉えられる。読者は全く同じではなくても，その出来事に沿わせながら自分の子どものころを振り返り，そこから感情を動かされると考えられる。同じ「過去の自身の経験と照らし合わせての語り」であっても，「この絵本を読んだことがある」「絵本を読んでいた記憶が浮かんでくる」という読むことに焦点を当てて感情生起をしている。この感情表現には「なつかしい」が見られるが，幼少期に日常的に絵本を読むということをしており，さらにそれから1度離れたから現在だからこそ表出するものだと考える。

次に「現在の自身の経験と照らし合わせての語り」からは「なつかしい」という感情が見られた。「絵本を読むことが久しぶり」である協力者自身の現状から感情を生起している。このことは，絵本を自分のために読むということが新鮮な状況であり，「なつかしさ」を感じるほどの体験であったことが示唆される。

最後に「読み方についての語り」では，「安心」「和む」「なつかしい」という感情が見られた。「絵が多いのであまり考えずに」ということから，言葉だけの文章とは違い自分で最初から場面を想像する必要がなく，描かれている画をきっかけに，いわば与えられたイメージを梯子代わりにして絵本の世界に入りやすくなったと考える。絵とひらがなで読むことと，最初から想像するというエネルギーを使うことなく読むということをゆるやかに強いられていることで，読者の意図するところとは別に，物理的に時間をかけられるという余裕や安心できるイメージを与えられる。そのことで「ほっこり」や「和む」という感情が表出したと考える。

(3) なつかしいという感情表現から

感情表現において「なつかしさ」が多く生起されている。楠見（2014）によれば個人的ななつかしさは過去の辛い記憶をポジティブに変化させ，幸せな気分を高め，自尊心や自己肯定感を高める効果がある。絵本には，その絵本を読んだ経験を問わずに「なつかしさ」を読者に促し，それは読者にとって肯定的な体験となることが示唆された。

2. 自分自身の語りから

本研究では感情生起の有無は問わずに，自発的に自分自身についての語りが見られた。「自分自身の幼少期」「自分自身の現在」ともに「物語内容・登場人物」「絵本・読書行為」の2つの観点から語られており，Table 4に示している。これらについて順に考察する。

(1)「自分自身の幼少期」

①「物語内容・登場人物」の観点から

まず，「自分自身の幼少期」を「物語内容・登場人物」の観点から語ることは，「はじめてのおつかい」を読むことで過去のことが想起され，幼少期の自身のエピソードについて語るに至ったと考えられる。登場人物と類似した経験があったということが読者に思い出され，また，それを筆者に語れるものだとしている。このことは「はじめてのおつかい」だからこそ表出したものだと考える。幼いころに経験した，または類似した経験を描いた作品だからこそ，幼少期のことについて語られたものだと考える。

②「絵本・読書行為」の観点から

「絵本・読書行為」の観点からは「はじめてのおつかい」に特化した語りではないと考える。絵本のサイズや装丁，絵が描いてある本を読む，絵本に触れるということ自体が，過去に絵本を読んでいたということを想起させ自分が絵本を読んでいたときの状況を語るに至ったと考える。「自分自身の幼少期」の語りには自身の過去を振り返り語る行為であるが，それについてやまだ（2000）は，過去の自分の出来事の語り直しについて人生に新しい意味を生成する行為として重要だとしている，本研究では，特に強制したわけではない状況で，部分的ではあるが自然と過去についての語りが見られた。絵本は読者の過去についての省察を促し，語る場を提供することで言語化され，そうすることで自分自身のことが整理され，人生に新しい意味を生成する一助となり得ることが示唆される。

(2)「自分自身の現在」

①「物語内容・登場人物」の観点から

次に，「自分自身の現在」について自発的に語られたものについて考察する。「物語内容・登場人物」の観点からは，「はじめてのおつかい」の登場人物や場面についての直接的な言及ではなく，おつかいを取り扱ったテレビ番組を見ていたことや，自分自身の家族構成について語られた。「自分自身の現在」についての語りは，「自分自身の幼少期」のように物語内容や登場人物を自分にリンクさせて自分自身について語るというより，そこから着想を得て，連想を広げたうえで現在の自分の語りとして表出したと考える。

②「絵本・読書行為」の観点から

「絵本・読書行為」の観点からは「久しぶりに読んだ」ということが語られ，それは個人の日常生活の中においては非日常になり得る経験であったと考える。一方で，アルバイトで絵本の読み聞かせをしているという語りは，絵本が非日常のものではないにも関わらず，自分自身についての語りが見られた。これは自分自身のために絵本を読むという行為が，自分の現状の語りにつながったと考える。

これらより，絵本という媒介物を1度通してからこそ，読者が自分自身について語りやすくなるということが考えられる。このことは，語り手と聞き手という二項関係ではなく，間に絵本という第三の物が入り三項関係になるからこその語りだと考える。また，読者が絵本を子どもの頃に読んでいた経験を持つことで過去のことを振り返りやすくなり，自分のために絵本を読むということで自分自身について語る重要な機会となり得ると考える。直接向き合う機会がなかった過去や現在の自分に対して，絵本を通すことで改めて振り返る契機になり，また，自分自身の現状について語りやすくなることが示唆される。

3. 絵本の多様性と読者へ内的体験を促す過程

Fig.1 より読者は複数の語りが複雑に影響し合いながら感情表出に至っている。このことから，絵本は読者への内的体験を促す過程が多様にあると考えられる。Table 1 では，絵本の鑑賞方法が「黙読・音読・観る・聴く・触る」と多様であることを示した。これらのことから，読者が絵本を鑑賞する方法，また，絵本が読者へ内的体験を促す方法の両者が多様であるという二重の多様性が絵本にあると考えられる。このことより，読者の内的体験はより一層賦活される可能性があると考えられる。

4. 絵本を読むという非日常的体験

絵本を読んで，内的体験を促された結果，読者はわずかではあるが「非日常」を体験したと考えられる。特に，読者が親しい仲ではない筆者に自分自身について自発的に語り，絵本の内容以外から様々な感情生起したことは，日常的に得難い「非日常」的な経験だと考えられる。つまり，絵本に接することで日常とは違う非日常の時間を体験していると考えられる。読者の「久しぶりに絵本を読んだ」という語りからも現在の協力者にとっては，絵本は「日常」のものではないことがうかがえる。そして，読者が大人になった今，絵本を読むことで絵本を読むことが「日常」であった幼少期のことが思い出されている。冒頭で述べたように，子どもから大人へと変わる時間軸所上の移行によって，絵本を読むという体験は「日常」から「非日常」へ移行する。また，Table 1 より絵本の「鑑賞場所」は限定されていない。つまり，大人が絵本を読むことは場所が「日常」のままでありながら「非日常」の体験が得られるものであることが示唆される。その結果として，大人は絵本を読むことで，物語内容だけでなく，絵本全体をもってして一時的に日常から切り離した留まる時間を得ることができる。絵本を読むことを「日常」の延長ではなく新鮮で重要な体験である「非日常」のものとすることは，絵本を読むという習慣を失った大人でしか起こり得ないことであり，それによって感情の生起や自己に向き合う時間を作ることができると考えられる。山口（1969）は日常に継起する事象が整合性に反する場合に，その事象は抹殺されて「世界が人間の『心』の合理性（全体性）に基づいて」構成されるわけではなく「『心』が世界の整合性に基づいて再構成」されるとした。つまり，逆説的に言えば合理的とはいえない絵本を読むということは，山口（1969）の「人間の『心』の全体性」につながると考えられる。

5. 今後の展望

本研究では，協力者が言語化できる部分を取り扱ったが，言語化されていない，あるいはできなかった部分にも協力者の何らかの内的体験は存在したのではないかと考える。また，幼少期に絵本を読んだ経験があり，現在は自分のためには継続的に絵本を読んでいないということを前提にしており，幼少期に絵本を読んだことがない人，あるいは継続的に自分のために絵本を読んできたという人についても検討の余地がある。今後は，対象を広げ，さらには協力者の言語以外の部分を取り扱うことでさらなる大人が絵本を読む意義，または絵本の可能性が広がると考えられる。

引 用 文 献

Doonan, Jane（1993）. *Looking at pictures in picture books*. Thimble Press. 正置友子・灰島かり・川端有子（訳）（2013）．絵本の絵を読む．玉川大学出版部.

藤本朝巳（1999）．絵本はいかに描かれるか．表現の秘密―．日本エディタースクール版部.

灰島かり（2013）．Doonan, Jane（1993）．*Looking at pictures in picture books*. Thimble Press. 正置友子・灰島かり・川端有子（訳）（2013）．絵本の絵を読む，訳者座談会，187．玉川大学出版部.

林美千代（2005）．棚橋美代子・阿部紀子・林美千代（編）．絵本論―この豊かな世界．創元社.

廣松新也・森田　均（2010）．絵本における基本的構造と表現技法の抽出．ことば工学研究会，**36**，127-129.

河合隼雄・松居　直・柳田邦男（2001）．絵本の力．岩波

書店.
広辞苑第六版(2008). (編)新村　出. 岩波書店.
小山内秀和・岡田　斉(2011). 物語理解に伴う主観的体験を測定する尺度(LRQ-J)の作成. 心理学研究, **82** (**2**), 167-174.
楠見　孝(2014). なつかしさの心理学―記憶と感情, その意義. なつかしさの心理学―思い出と感情. 誠信書房.
Nikolajeva, Maria, & Carole Scott(2006). *How Picturebooks Work*. Vol. 14. Routledge.
川端有子・南　隆太(訳)(2011). 絵本の力学. 玉川大学出版.
松居　直(1973). 絵本とは何か. 日本エディタースクール出版部.
松瀬喜治・松瀬留美子(2013). 絵本に学ぶ臨床心理学序説. ナカニシヤ出版.
宮原浩二郎(2009). 社会美学のコンセプション(2)：エレン・スカリー「美と正義について」をめぐって. 関西学院大学社会学部紀要, **107**, 73-86.
中川あゆみ(2002). 1970年代の絵本―「絵本ブーム」と呼ばれた時代. 鳥越信(編)はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅲ―戦後絵本の歩みと展望―. ミネルヴァ書房.
中村　明(1993). 感情表現辞典, pp.14. 東京出版会.
大平　健(1994). 診察室に来た赤ずきん物語療法の世界. 新潮文庫.
酒井邦嘉(2013). 芸術を創る脳：美・言語・人間性をめぐる対話. 東京大学出版会.
千住　博(2013). なぜ絵画は美しいのか, pp.194. 酒井邦嘉(編). 芸術を創る脳：美・言語・人間性をめぐる対話. 東京大学出版会.
瀬田貞二(1985). 絵本論―瀬田貞二子どもの本評論集―. 福音館書店.
嶋根克己(2001). 非日常を生み出す文化装置―日常と非日常の社会学にむけて, pp.195.
嶋根克己・藤村正之(編). 非日常を生み出す文化装置. 北樹出版.
田澤　薫(2007). みいちゃんを送りだしたあと：『はじめてのおつかい』は誰を支えたか. 幼児の教育 106 (**6**).
鳥越　信・内ケ崎有里子・村川京子・石川晴子・宮本大人・香曽我部秀幸・川北典子・齋木喜美子・道端香苗・中川あゆみ・大橋眞由美・福島右子・窪田美鈴・滝川光治・森井弘子・荒木瑞子・竹内オサム・目黒　強・岩崎真理子(2001). 鳥越　信(編)はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅰ―絵入本から画帖・絵ばなしまで―. ミネルヴァ書房.
鳥越　信・宮本大人・巴　憲子・寺前君子・大橋眞由美・川北典子・竹迫祐子・竹内オサム・阿部紀子・勝尾金弥・西田良子・滝川光治・道端香苗・棚橋美代子・香曽我部秀幸・村川京子・福島右子・石川晴子・丸尾美保・平岡弘子・森井弘子・中村悦子(2002a). 鳥越　信(編)はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅱ―15年戦争下の絵本―. ミネルヴァ書房.
鳥越　信・谷　暎子・石川晴子・酒井晶代・近藤昭子・大橋眞由美・中西美季・高橋久子・中川あゆみ・三浦精子・右田ユミ・齋木喜美子・滝川光治・村川京子・佐々木宏子・石井光恵・西田良子・土居安子・藤本朝巳・岩崎真理子・香曽我部秀幸(2002b). 鳥越　信(編)はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅲ―戦後絵本の歩みと展望―. ミネルヴァ書房.
やまだようこ(2000). 人生を物語ることの意味：なぜライフストーリー研究か？(展望). 教育学心理学年報, **39**, 146-161.
山口昌男(1969). 失われた世界の復権, pp.160. 山口昌男・今福龍太(編)(2013). 山口昌男コレクション. ちくま学芸文庫.
山本英輔(2016). ハイデガーの芸術論における空間の問題. 哲学・人間学論叢 = Kanazawa Journal of Philosophy and Philosophical Anthropology, **7**, 1-12.